

沙門はくいの CL 閑話 46 徳山托鉢

次何をしますか

遠藤博因 hakuin@river.ocn.ne.jp

今回もまた禅の逸話から始めたいと思います。

ある日、徳山老師は鉢を持って食堂に下りてきた。雪峰和尚は

「老師よ、まだ鐘も鳴っていませんし、太鼓もまだです。どこへ行かれるのですか」と問うた。すると徳山老師はさっさと自室に戻ってしまった。

雪峰がこの出来事を巖頭に告げると、巖頭は

「さすがの大徳山もまだ禅の末語の一句を会得していないようだ」と言った。

これを聞いた徳山は、巖頭を呼びつけ

「おまえはわしを正しいと思っていないのか」と問うた。巖頭は徳山の耳元で一言ささやくと、徳山は満足げに黙って立去った。

翌日、徳山は提唱の座に着いたが、いつもの話とは違っていた。そこへ巖頭が修行僧の前へ出てきて、手を打って大笑いして

「何とうれしいことだ。老徳山も禅の最後の句を会得したとみえる。以後天下の何人といえどもを説き伏せることはできないだろう」。



今回のお話は三人の僧が登場し、ただでさえ難解な禅の話がなお一層込み入った感じがあります。なるべく解り易くするため、四つの段落に区切ってみました。

第一段は、徳山という老僧が自分の鉢を持って食堂に下りて来たところに、雪峰という中堅の僧がまだ食事の合図である鐘や太鼓が鳴っていないのにどうしたことですかと尋ねました。禅の修行道場では、食事の時はそれぞれ自分の器を持ってきて、その器で食事をいただきます。大中小の器が重なって袱紗（布切れ）で包んであります。箸やお粥をいただくときに使う匙も一緒に包んであります。食事が済むと白湯やお茶などで器をきれいにして、また袱紗に包んで持ち帰ります。炊事場でみんなの食器を洗うという手間や水資源を省いた、エコなシステムになっています。また修行道場では、鐘や太鼓が全ての行事の合図となっています。徳山老師はまだ食事の合図が鳴っていませんよと言われ、そそくさと部屋に戻ってしまったということです。逆に雪峰は師である徳山老師をそそくさと自室へ戻らせたことに少し優越感を感じたのかもしれませんが。

第二段では、雪峰が兄弟子である巖頭にこの出来事を自慢げに話したのでしょう。そして巖頭も雪峰を肯定して、徳山老師も真の悟りを開いていないようだと言ったと批判めいた発言をします。

第三段は、今度はこの発言を聞きつけた徳山老師が弟子の巖頭に詰めよります。緊迫した感がありますが、巖頭は徳山老師の耳元で一言囁き、徳山老師を納得させてしまいます。巖頭は師の怒りをも上手く言い包めてしまったようです。

そして第四段は、翌日徳山老師が修行僧の前で説法をしているときに、巖頭はいきなり前へ進み出て徳山老師を大きく持ち上げます。

各段ともそれぞれの僧たちは何故このような行動や言動を取ったのか、理解し難い面もありますし、また色々な理由付けもできる感じです。巖頭は雪峰が少し得意気になったところを、頭ごなしに否定するのではなく、愚直で修行が浅い雪峰に刺激となるよう一連の芝居めいた行動をとることで、雪峰の心眼を開かせようとしたのかもしれませんが。しかしながら、禅の修行ではそのような物語の分析や解釈は全く必要としていません。ただ真っ直ぐに物語（公案）と向かい合うことだけなのです。老師


が間違って鉢を持って食堂へ下りてきたら、どのように対処すればよいのか。悟りという内面的な体験を容易に他人が判断できるものなのか。禅は物事、事実と真摯に向かい合わなくてはいけないのです。

CLでも状況に則した行動を取ることは重要視されています。次に何をすべきなのか、時には言葉も必要としますし、時には沈黙という行動も必要です。テニスのボレーのように素早く反応することが要求される場合、努力も必要だということも知っていなければいけません。未亡人への慰めの言葉をかける場合、思慮ある接し方が要求されます。どんな場合での状況に則した行動が必要なのです。『Gateless Reflections by D. K. Reynolds』

現実を見据え次に必要なことは何かを見つけて行動に移してゆけば、自ずと生活そのものが建設的な生き方になりますね。さあ、あなたは次に何をしますか？

今回も誌面にて皆さんとお会いできるご縁に感謝して

合掌
(富山県南砺市井波 CL インストラクター)

 [目次へ戻る](#)